

日本キャリア教育学会ニューズレター 2019 年度・冬号(2020.2.29 発行)

発行：日本キャリア教育学会 情報委員会

<http://jssce.wdc-jp.com/>

※2019 年度から従来の「ニューズレター」を機能分化させて「メールニュース」(お知らせ、随時または 月 1 回配信)と「ニューズレター」(特集記事、春夏秋冬の年 4 回配信)に分けて配信しています。

※2019 年度はニューズレターの特集テーマを「新しい時代のキャリア教育について様々な立場から考える」と設定しました。

冬号(第 4 弾)では「学校現場(小中高)の担当者に聞く」ということで、様々な立場から執筆していただきました。

※ニューズレター(2020 年度・春号)は 4 月末の発行予定です。

特集テーマ「キャリア教育の多様性」(第 1 弾 外国にルーツを持つ子どものキャリア教育)として、豪華執筆陣の原稿が読める予定です。

お楽しみに!

+.....+

## 目次

### 【特集】

新しい時代のキャリア教育について様々な立場から考える  
～学校現場(小中高)の担当者に聞く～

[荒川文雄\(福島県東白川郡棚倉町立棚倉小学校\)](#)

[佐々木知子\(秋田県大仙市立平和中学校\)](#)

[濱元克吉\(荒井学園新川高等学校\)](#)

[菊井雅志\(京都府教育庁指導部学校教育課\)](#)

### 【書評】

[『よくわかるキャリアコンサルティングの教科書』](#)

+.....+

---

【特集】新しい時代のキャリア教育について様々な立場から考える  
～学校現場（小中高）の担当者に聞く～

---

「ほめポイント」を共有し、資質・能力を育む地域に開かれた教育課程を  
目指して

荒川文雄  
福島県東白川郡棚倉町立棚倉小学校 校長

はじめに

本校では、令和元年度「なりたい自分になるために学び続ける児童を育成する教育課程の創造～資質・能力を育み、キャリア発達を促すために～」を研究主題に掲げ取り組んできた。

その成果を踏まえ、地域を担う子どもたちを育成するために、育てたい資質・能力（基礎的・汎用的能力）を「ほめポイント」の形で地域と共有し、地域の教育資源を活用しながら、キャリア教育を推進していくことを提言したい。

棚倉町教育委員会の成果

棚倉町教育委員会では、6年前から他に先駆けてキャリア教育に取り組んできた。その結果、「基礎的・汎用的能力の具体化・明確化及びその評価」のあり方を開発し、「資質・能力を伸ばすための学習マネジメントサイクル」を明確にするとともに、職業体験活動「チャレキッズ」など「体験活動のあり方」を工夫してきた。特に、基礎的・汎用的能力の評価のために作成した「キャリア意識調査」は、キャリア教育におけるアウトカム評価の試みとして、価値あるものである。

「ほめポイント」を基にした関連指導

本校では、これを生かし、その手法をさらに確立していくために、「キャリア意識調査」の4つの質問項目などをもとに本校児童に身に付けさせたい内容を加えて、各3項目ずつを育てたい資質・能力の具体的事項として設定した。本校では、2学期制を採用しているので、前期・後期をさらに2分割した四半期を実践の単位とした。四半期ごとに育てたい資質・能力を教師が設定し、子どもにも意識させ、将来にわたって伸ばしたい子ども

のよさを「ほめポイント」として把握し、それをもとに、各教科や各領域の授業など教育活動全体を通して、称賛していく。これを「関連指導」と呼んでいる。

「関連指導」においては、あくまでも授業のねらいを達成する過程で、「ほめポイント」に基づいて児童のよさを称賛していく。称賛しやすいように、指導計画の作成に当たっては、各教科・各領域の関連が図れるように、内容や題材を配列した。

#### 学級活動を中核にした四半期ごとのきめ細かな指導

特に、キャリア教育の要である特別活動では、学級活動を中核として四半期ごとに振り返りと目標設定ができるようにした。例えば、3年生の第1四半期には、育てたい資質・能力を「規則正しい生活習慣を身に付ける」にして、各自のめあてを設定し、6月の学級活動「めあてをふりかえろう」で振り返り、第2四半期の目標を設定した。

授業の流れとしては、導入でソーシャルスキルトレーニングを取り入れ意欲づけをして、展開で自己目標を振り返り、児童相互で交流し、終末で新たな意欲と目標をもつ活動を取り入れるようにした。学級活動（3）の振り返りの授業は、できたことを振り返るので、「ほめポイント」を中心にほめることが主になる授業になる。授業の雰囲気は前向きで、子どもの表情も明るい。その時に使用したワークシートは、主要行事の反省と共にキャリアパスポートとして保存され、次の学年に引継がれる。

#### 年間の流れ

教育課程における年間の流れとしては、第1四半期（4～6月）では運動会を中心に資質・能力を伸ばし、第2四半期（7～9月）では、5・6年は夏季休業中の「チャレキッズ」を、1～4年は夏休みの体験などを中心に資質・能力を育成する。その結果は、前期の通知票で保護者に知らせた。第3四半期（10～12月）は、音楽会を中心に資質・能力を高め、12月の研究公開において児童の姿で発表した。第4四半期（1～3月）は、1～3年生は修了式をゴールに、4～6年生は卒業式をゴールに資質・能力を育成する。実践の成果は、通知票で家庭に知らせ、指導要録にも記載する。

#### 今年度の成果と課題

教育委員会で実施した「キャリア意識調査」では、実施前の平成30年11月と令和元年11月の結果を比較すると、肯定的評価が7～10%増

えている。QUテストの経年比較でも、「学校生活満足群」が52%から79%に増加している。しかしながら、学校評価においては、「夢や希望を持っている」「なりたい自分になるために学び続けている」における保護者評価では、肯定的評価が半分程度であった。

#### 次年度の実践に向けて

保護者等の理解を深めていきたい。せっかくほめることが主体の授業を行っているので、保護者や地域の方々にも参加してもらうようにする。学級活動(3)の振り返りの授業を公開するなどして、学校が育てたい資質・能力を「ほめポイント」の形で保護者・地域と共有し、一緒にほめてもらうのである。また、地域の教育資源を最大限に活用したい。教育活動全体を通して、地域の人的資源や物的資源を活用した体験活動を可能な限り取り入れる。特に、棚倉町の歴史や文化のよさを追究し、町の将来を考えていくような総合的な学習の時間を創出していきたい。

---

### これからのキャリア教育はどうあるべきか ～中学校編～

佐々木知子

秋田県大仙市立平和中学校 教諭(教育専門監)

私は現在、秋田県の公立中学校に勤務している。これまで、学級担任としてまた学年主任としてキャリア教育に関わってきた。その立場から、中学校でのキャリア教育の目指すべき方向性についての私見を述べさせていただく。

私の母は、昭和一桁生まれ。父親が病気で仕事ができなかったために貧しい子ども時代を過ごした。だから、彼女の口癖は「わでままけ。」(共通語訳:自分でご飯を食べなさい。→自立して、自分で生計を立てなさい。)そしてもう一つの口癖は「やらねねごどはおもしえぐやれ。」(共通語訳:やらなくてはいけないことは楽しくやりなさい。)だった。楽しくないことでも、楽しそうにすると楽しくなるという、母の経験則からの言葉。しかし、姉はこれらの言葉をあまり記憶していないそうだ。小さい頃からいつも姉と比べられて、「めんけ〜!」(共通語訳:かわいい!)と言われるこ

との決してなかった次女に対して、専業主婦がまだまだ多かった時代の親からの、温かくも切ないメッセージだったのかもしれない。

そんな私も大学生になった。夏休みに先輩にそそのかされて甲府盆地の桃農家に寝泊まりし、桃の収穫のアルバイトをすることにした。毎日食べ放題の美味しい桃は嬉しかったが、あまりの暑さと労働の大変さに「農業」という選択肢は私の職業選択から見事に消えた。この実体験を通して、私は見るより聞くよりまずやってみることが大切だと悟ったのだ。だから、意味のある体験をすること、そしてそれを自分のこととして考えることがキャリア教育においては必須だと考える。

私が以前勤務した協和中学校は、文部科学省のキャリア教育実践プロジェクト指定校になるなど、多くの取組をしてきた。長年継続してきたことで、地域の方からも広く受け入れられて今に至っている。特に、二年次の職場体験学習は「地域の子どもを地域が育てる五日間」であると感じている。

学年主任当時、私は、職場体験の自己評価・職場評価・保護者評価の三者評価を取り入れた。なぜかという、それまでの職場体験学習では、生徒の自己評価と、受け入れてくださった事業所や保護者の評価に大きなギャップが認められたからである。日本の子どもたちは自己肯定感が低いとよく言われるが、その一方で生徒は自分に対する評価が甘い。そして、できていないことも「やればできる」と自分勝手に過大評価していることが多い。職業人として見たときの現在の資質・能力はどうなのか。そのことを把握させたいための通知表（職場評価）であったが、以下はその通知表を読んだ後の生徒のコメントである。

- 自分のダメなところを見つけることができた。自分が話しかけても返事がなかったりして、自分が思っているよりも自分の声は小さいということが分かった。
- 自分では明るい挨拶を頑張っているつもりだった。しかし、相手の方には伝わっていないことが分かった。直したいと思った。まず、挨拶運動をしっかりとやる。

たった一日限りの職場体験なら「おじまげる」(共通語訳：かっこつける/映画「踊る大捜査線」で柳葉敏郎さんが話した秋田弁)もできるであろう。しかし五日間連続となると、地が出てくるし素の自分を見抜かれてしまう。この学習を通して、生徒は職業人として求められる、他者に配慮しながら積極的に人間関係を築くコミュニケーションの大切さに気付いたのだ。そ

して、自分自身のこととして受け止め、実生活を振り返りながら、今何をすべきかを考え行動に移すという望ましい姿に変容したのだった。

また、保護者からは次のような感想が届けられた。

- 家の中では自分のその時の気分で無愛想ということがよくあったが、最近良くなってきた。笑顔で接することの大切さを教わってきたのだろう。
- これまでは部活動と勉強が会話の中心で「大人の会話」というものが皆無だった。体験を通して、「働く」という視点で、私たちと同じ目線で物事を見て考え、話すようになった。

協和中学校では、事前学習を計画的に実施して職場体験学習を行った。そして、学習後は職場からの生の声をうけて一人一人が礼状を書いたり、保護者からの一言をもらったり、後輩たちに向けてお互いの体験を報告会でシェアしたりと事後の活動も意図的に行った。これら一つ一つの学びを点ではなく、線でつなげたことで意味付けができたと思う。また、生徒にとっては地域の理解と協力のおかげで、地域の人たちと直接ふれ合い、厳しさと共に温かさも身をもって体験し、五日間の長い体験に感謝しながら、ふるさとを愛する心も培うことができたのではないかと思う。

私はこのグローバル化の時代に「将来どこでも生きていける人」になってほしいと願いながら英語を教えている。東京書籍の NEW HORIZON 二年の教科書で、中学生の佳奈が将来の夢を発表する場面がある。

「私はコンピュータープログラマーになりたい。二つ理由がある。一つ目はネットサーフィンが好きだから。二つ目は役に立つウェブサイトを作りたいから。だから、その仕事は私にとってはパーフェクトだ。よいプログラマーになるために、数学・理科と英語の勉強を一生懸命にがんばっている。」

生徒が自信をもって自分のよさや自分らしさを発揮できるように、教師として一人一人の生徒を理解し、よさを見つけ、励ますことを忘れない。そして、多様な選択肢の中から自分の個性や興味・関心に基づいて、将来について保護者や友だちなどの他の意見も取り入れながら考えさせ、実現に向けて努力できるように支援している。

とどまることなく変化する社会の中で、あくまでも明るく笑顔で、生徒と共に未来を語り、共に夢を語りたい。将来を担う子どもたちが「生きる力」を身に付け、自立した幸せな生活を送ってほしい。そのためには様々な課題に柔軟に、たくましく対応していくことができるように、アップデートしながら、全教科全領域との関連を図り地域に根ざしたキャリア教育

を一層推進していくことが大切だと思う。そのためにも、共に学び続ける教師でありたい。

---

## 地域と連携した進路指導

濱元克吉

荒井学園新川高等学校 校長

本校は富山県北東部の「新川地区」にある唯一の私立高校である。富山県は公立志向が大変強く、私学である本校は、地元中学校の受け皿的な役割でもあり、公立高校の受験に失敗して入学してくる生徒も少なくない。そのため、全日制の普通科ではあるが、四年制大学や専門学校などへの進学から地元企業への就職まで、多様な進路希望を持つ生徒が集まる。

本校の生徒の多くは、自分に自信がなく劣等感を強く感じている。進路目標を立てても早い時期に諦める傾向があり、特に就職に関しては、「自分は勉強ができないから就職する」といった消極的な就職が目立ち、早期離職者も多く出していた。本校もこれまで一般的な進路指導を行っていたが、学校側の努力と成果が比例しなかった。富山県の新川地区は、他の地区と比べ早いペースで少子化が進む地域で、若者の都市部への流出が大きな問題となっている。私学を経営する立場も考えると、卒業生の進路実績や地域の衰退は経営と直結する。平成28年度より、これまでの指導を改め、未来に向けてどんな生徒を育てればよいか、この地域を守るために本校ができることはないかを考えた。(企業でいうところの CSV: Creating Shared Value のような考え方でしょうか。)

これからの時代に必要な人材は、過去の大量生産大量消費時代に必要であった「真面目」「黙々と働く」といった機械の歯車的な人ではなく、これからの未来を考えると、失敗にもめげない、変化に強い、そして自分の考えを持っているといった人材であると考え。本校の生徒たちには、できれば肯定的な気持ちで地元に残って、この地域を支えてほしいという想いもある。進路指導の目標(現在の学校教育目標)を「自らの価値観を持ち、地域社会の未来を支える使命感を持った生徒の育成」とし、さまざまな取り組みを見直した。

目標の中にある「価値観」というものは、他人に決められるものではな

い。また、突然に決まるものでもない。価値観は定まっていく過程があり、①興味・楽しさ・ワクワク・興奮・心地よさ→②嗜好→③価値観→④美学といった流れで徐々に定まっていくと考える。本校はこれまで、過去の実績に基づいた進路指導と規律重視の厳しい生徒指導（をしなくてはいけなかった…）であったが、この指導は、もしかしたら一部の大人（教員）の価値観をいきなり押し付けていることになっていたのでないかと反省する。

新しい取り組みは、上記に示した③の価値観が定まるまでの①や②あたりの価値観の土台を育てる活動に重点を置いた。さらに、この土台を育てる活動に、教員以外の地域の大人や自治体などが関われば、価値観の中に「地域」も組み込まれると考えた。平成29年には、地元である富山県魚津市・富山大学と「新川創生プロジェクト（地域に残り、地域社会を支える若者の育成）」を共通テーマとした包括連携協定を結び、教育によって地方創生や地域人材の輩出する機能の研究を共同で取り組み、三者が連携した取り組みを企画した。

#### 【取り組み事例】

##### ・若手社会人交流

地元で活躍する社会人と都会で活躍する社会人を講師にして、経験談などを聞く。ポイントは、社会人が「若手」であることと「失敗談」を話してもらうこと。身近な大人も失敗をして、それを乗り越えてきていることを感じてもらう。

##### ・PBL（問題解決型学習：Project Based Learning）を取り入れた総合学習「魚津市提案」

「自分たちが住みたいくなるような街になるには」をテーマに、自分たちの考えをまとめ、魚津市長へ提案する。市職員から市の現状を聞いたり、実際に街に出たりして、自分たちの考えをまとめ、発表するが、市内散策には市が協力し、提案の発表や本校職員の生徒への指導法などには富山大学が協力する。若い発想で面白いアイデアが出る。

##### ・地元企業によるインターンシップ（2学年全員対象）

本校の取り組みの趣旨に賛同してくれる地元企業に依頼して実施する。ポイントは「企業名」ではなく「職種」で実習先を決めること。また、職業訓練だけではなく、企業の方から地域の課題や企業理念などを聞く時間

を作ってもらい、後日、考えをまとめ、後輩へ発表する。

・未来塾

月1回、放課後の時間を利用し、地元で活躍する方を呼んで講演をしてもらう。講演のテーマは自由。生徒の参加も強制しない。それでも毎回20人以上の生徒が参加する。その他にも、地域に関わるボランティア活動にも積極的に参加している。

これらに取り組んだ結果、生徒の進路に対する意識以外にも、学校にも変化が表れてきた。放課後学習（個々のレベルに合わせたプリント学習）を行っているが、取り組む姿勢が良くなり（以前はサボる生徒もいた）、学力が急上昇した。（ベネッセ基礎力診断テスト：9割の生徒の成績が向上した。）学校が明らかに落ち着いてきた。（問題行動が起きない。）生徒の価値観の土台部分が育っている証拠だと思っている。生徒には、取り組みが終わるごとにルーブリックを使った自己評価も行っており、自己評価と学力との相関を現在分析中である。

自己実現のためには、つまずいても立ち上がり、粘り強く問題解決を図る必要があり、その意欲を醸成できるよう、さまざまな経験から自己有用感や自己肯定感が高まる経験を積み、「やればできる」実感を抱かせたいと思っている。今の生徒は、大人の顔色をうかがい、大人が期待する答えを出そうとする。生徒には、「価値観は自分で作るもの」「失敗してもよい」「目標は変わってもよい」と言っている。

---

## 教育活動の拠り所としてのキャリア教育の可能性

菊井雅志

京都府教育庁指導部学校教育課 指導主事

中学校の社会科の教員として勤務しておりました私が、京都府教育庁指導部学校教育課の指導主事を拝命して3年目になります。主に義務教育課程の社会科と進路指導・キャリア教育を担当して参りました。そして、本年度より「未来の担い手育成プログラム」及び「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」を担当しています。これは、本府が打ち出している「認

知能力と非認知能力の一体的育成」について、従来の狭義の学力である認知能力だけでなく学校教育の中での「非認知能力」育成の意義を再認識する視点からのアプローチを具体化した施策です。この施策は、京都府内を中心に活躍されている企業・大学からいただいた課題を中学校2年生が解決するという課題解決型学習を軸に、授業改善などを通して、生徒が学び方を体得し、学ぶ意欲を持つことのできるようにと展開されています。

また、中学校現場におりました時から、私設の研究会を主宰し、昨年末は小中高70名ほどの先生方に御参加いただきました。今回、光栄にもニューズレターへの寄稿の機会を頂戴致しました。「令和」の時代に求められるキャリア教育」とのお題ということですが、現在、私が勤務している中で感じた、教員が抱えている漠然とした不安について考えてみたいと思っております。当然、内容については私の個人的見解であり、一般化できるものではありません。その点はお許しいただきたく存じます。

新学習指導要領が4月から小学校で全面実施の予定、経年で中学校、高等学校と順次実施されていきます。その学習指導要領では、「資質・能力の3つの柱」、「社会に開かれた教育課程」や「主体的・対話的で深い学び」といった言葉が飛び交い、学習指導要領の改訂前から始まっている「特別の教科道徳」だけでなく、「プログラミング教育」、「外国語教育」、「消費者教育」「主権者教育」「言語能力の育成」「伝統や文化に関する教育」…などが「新たに取り組むことやこれからも重視すること」として挙げられています。また、評価についても従来の4観点（国語は5観点）の観点別評価から3観点になるなど、大きな変革の渦の中にあります。

児童生徒を目の前にする現場の教員にとって、このたった数行の内容はとても重く、児童生徒に力を付けることのできる状態にするには、挙げられた項目それぞれに莫大な時間と労力をかけなければならないものです。学習指導要領の完全実施を前に、次から次とやってくる「しなければいけないこと」をこなすために、それも、目の前の多様な児童生徒に少しでも効果のある内容にするために、教員は日々努力をしています。

一方、この学習指導要領では、「資質・能力」として、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等の3つの柱が示されました。その3つについて、知識・技能の「習得」、思考力・判断力・表現力等の「育成」、学びに向かう力・人間性等の「涵養」が目指されていますが、学びに向かう力・人間性等という、時間をかけて伸ばしていくこと、まさに「涵養」することが求められる児童生徒の資質・能力についても注目すべきことが示されています。この点については、科学的な根拠を伴わなくとも、我々現場の教員として「涵養」される資質・能力があることは体験

的に感じています。

特に「涵養」される資質・能力を効果的に育てていく、ということを考えて場合には、目的や目標の共有が、長期間なされるというだけでなく、教科や領域など学校教育や場合によっては家庭や地域も含めた広範囲に渡った取組みが必要になります。そのためには、教員の広い視野やメタ認知力を働かせる必要があるということになります。

長期間に渡る、広範囲の視野を持った教育の方向性や目標、目的の検討には、本来、多少の時間と手間をかけなければならないはずです。

しかし、先ほどもお話ししたような、学習指導要領の改訂に関わる（教員の「働き方」が問題になっていることからもお分かりの通り、それ以前からですが）業務の中で、そうした重要な部分まで手をつける余裕がないことも教員が感じている現実的な悩みなのかもしれません。

実はそのような状況は、私が教員になった頃から変わることなく続いていることですので、逆に言えば、少なくとも私よりも若い世代の教員は、広い視野やメタ認知を働かせる視座に立って教育を見つめる経験を得難くなっていることも考えられます。

このようなことは、先行きが不透明な激動の社会の変化と相まって、教員が意識、無意識に感じている不安に繋がっているののかもしれません。

私は、教員が意識、無意識に感じているそうした不安を解消する一つの手がかりとして、「キャリア教育の視点」は有効であると考えています。

「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」である「キャリア教育」の「基盤となる能力や態度を育てる」は、特に義務教育段階の教育を担っている小中学校の教員にとって教科や領域、行事など全てに共通する視点として捉えることができます。それも、世代交代が進んでいる現在の学校現場であっても「目の前の子ども達が今の自分の歳になったときに、どのような力を持っていて欲しいか」というシンプルな問いによって、そのための方向性や目標を意識しやすく、長期間に渡る、広範囲な視野を持った教育活動に一貫性を持たせることが可能になるものではないでしょうか。

教育委員会事務局の役割の一つは、示された理念や方向性を、教育活動に取り入れていくため具体化した一例を、施策を通してお伝えすることだと思っています。「未来の担い手育成プログラム」及び「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」もこれからの教育の在り方や方向性を示すための施策になればと考えています。施策を形骸化させないためには、「キャリア教育の視点」が児童生徒の育ちを導く方向性を示すということを、現場で奮闘している教員に体感してもらえる仕掛けが必要であると強く感じてい

ます。教育活動の根底にあるはずの方向性や目標としても、「キャリア教育」の意義は今後、益々高まっていくでしょう。キャリア教育に携わる全ての方々のお力をお借りして、予測困難な社会を生き抜くことのできる資質・能力の育成ができる学校教育を作っていく必要があります。これらを意識した形での「キャリア教育」の研究、実践や発信が今以上に多くなることを望んでいます。今後とも御協力・ご示唆を賜りますようお願い致します。

---

## 【 書 評 】

---

『よくわかるキャリアコンサルティングの教科書』

(渡部昌平 (著) 金子書房 2019)

<https://www.kanekoshobo.co.jp/book/b472245.html>

高丸理香 (鹿児島大学)

本書は、キャリアコンサルタントの資格取得を目指している方を対象としたものではない。平成 28 年より国家資格となって以降、国家資格の登録者数だけでも 3 万人を超えたという。それ以外にも、国家検定であるキャリアコンサルティング技能検定をはじめ、キャリアコンサルティングに係る資格をあちらこちらで目にするようになった。

資格を取得することで、ある程度の知識や技能を担保することができる点では、資格取得が増えることは望ましいことかもしれない。それは、我が国の雇用システムや労働観がめまぐるしく変容しつつあるなか、「いかに働くか」を「いかに生きるか」と結びつけて考えなければならない局面が増えているからである。しかし、それゆえに、キャリア形成の“伴走者”でもあるキャリアコンサルタントは、“資格を持っている”だけでは、全くもって務まらないのが実情である。

このような状況から、本書は、“実践家”としてスキルアップを図ろうとするキャリアコンサルタントにとっては必携の書となろう。「はじめに」のなかで、実践家がより望ましい実践の経験を積むための教科書であり、参考書であると述べているだけあり、本書は知識を増やすことよりも、実践での応用に向けた「発展学習」として、個人またはグループで熟考できるように工夫されている。しかし同時に、「キャリアコンサルティング実施の

ために必要な能力体系」にも沿っており、これからキャリアコンサルティングを学ぼうといった人にも、分かりやすい内容なのである。

本書の第1部は実践家に、第2部は指導者に向けたものである。第1部は、キャリアコンサルティングの社会的意義に始まり、キャリアコンサルティングを行うために必要な知識や技能、キャリアコンサルタントの倫理と行動と続く。そして、第2部では、グループアプローチ、教育指導、事例指導といったより具体的な研鑽のあり方について説明されている。

このように、構成が明確でシンプルに整理されているため、知りたい部分を、すぐに探すことが可能である。たとえば、知識を補足してキャリアカウンセリングの理解を深めたいと思うのであれば、第1部第2章の目次を見るとよい。そこには、理論や理論家、心理療法（臨床心理学）、職業能力開発（リカレント教育を含む）、企業におけるキャリア形成支援、労働市場、労働法規、学校教育、メンタルヘルス、ライフステージ、発達課題、転機、相談者の多様な特性と、多岐に渡るトピックスが並んでいる。

本書の使い勝手の良さは、これだけではない。説明の最後には、次のステップへの具体的な促しがあるのだ。テーマによっては、ほんの数行の説明しかなく、物足りなさを感じる。しかし、それも実践家キャリアコンサルタントとして研鑽するうえで、“ありたい方向性”を自らで考え、定めていくための仕掛けなのかもしれない。読むと明快ではあるものの、文字として見えないところに、難しさの本質が見え隠れしている。それが本書の特徴と言える。

---

+++++

◇日本キャリア教育学会ニューズレターは、日本キャリア教育学会情報委員会が発行し、特集テーマに沿った記事を会員のみなさまにお届けするものです。

◇会員の皆様のメールアドレスの確認・登録を継続的に行っております。身の回りの会員でニューズレターが届いていない方がおられた場合は、学会事務局（[jssce-post@bunken.co.jp](mailto:jssce-post@bunken.co.jp)）宛に受信用のメールアドレスから登録申請していただきますよう、お伝えください。

◇ニューズレターに対する皆様のご感想・ご意見・ご提案を随時お待ちしております。

情報委員会（[jssce-ic@googlegroups.com](mailto:jssce-ic@googlegroups.com)）まで気軽にご連絡ください。

◇キャリア教育関連の著作を発刊・発表した会員は、是非とも学会事務局

まで献本いただければ幸いです。学会ウェブサイト上にタイトルと著者  
名を掲載した上で、書評欄で取り上げさせていただきます。

◇文中敬称略

日本キャリア教育学会情報委員会 発行  
委員長：家島明彦 副委員長：渡部昌平  
委員：京免徹雄、長尾博暢  
高丸理香、竹内一真、本田周二

+++++